

# 学校における養護教諭の行う 比較的軽微な救急処置対応のあり方 第1報 ～現職養護教諭と養護教諭志望学生の共同学習による効果～

## A Study of Slight First aid of Yogo teacher in School the 1st Report -Cooperative Learning of Yogo Teacher and University student-

小 林 央 美\*  
Hiromi KOBAYASHI\*

### 要 旨

本研究は、学校で行う養護教諭の特性を活かした比較的軽微な救急処置における現職養護教諭と養護教諭志望学生の共同学習による効果検証を目的とした。

養護教諭と養護教諭志望学生による少人数での座談会形式のオンラインによる共同学習を行った結果、学生においては、生徒の先行情報と観察による初期対応、生徒とのやり取りと多くの先行情報を活用して、身体症状を含めた生徒理解を深めニーズの共通化を図ることや学生なりの養護教諭観の問い直し、学部における学びの意味などに気づいていた。養護教諭においては、学生の基本的で素朴な質問により、省察を触発され、根拠を持った暗黙知による対応について言語化し、自覚化する場面がみられた。

このように、現職の経験した救急処置事例を軸として、学生は学内における理論的な学びと実践を往還させて実践的思考力と実践力を、現職は自己の実践を根拠もって行っていることについて理論的に省察することを通して実践力と省察力を学ぶことにおいて、双方の学びの深化がみられた。

キーワード：養護教諭、軽微な救急処置、養護教諭志望学生、共同学習

### 1 はじめに

学校における救急処置は、救急車要請を必要とする緊急度の高い症例から簡単な処置等で教室復帰が可能な軽微な症例までその範囲は広い。その実態は、来室者のほぼ90%以上が外科・内科的いずれにおいても軽微な症例である<sup>1)</sup>。しかし、緊急度の高い症例への救急処置能力は重要であり、これまでの多くの研究で判例分析をもとにした養護教諭の救急処置の役割<sup>2)</sup>やアセスメント能力<sup>3)</sup>、ヒヤリ・ハットの事例分析<sup>4)</sup>等が明らかにされている。

一方、杉浦による養護教諭の救急処置の指導過程は、①アセスメント－②判断－③処置－④保健指導－⑤記録・評価の5段階が示されており、医学的・教育的双方のアプローチを含んでいる。このように杉浦に

より④保健指導や⑤記録・評価といった学校における養護教諭特有の救急処置の過程について示唆されているにもかかわらず、これまでの研究は緊急度が高い症例であることから①～②に重点が置かれたものがほとんどである。養護教諭の行う救急処置については、緊急度が高い症例への医学・看護学的側面からの研究と教育・研修が主流となっており、学校現場で多数発生する軽微な症例への教育的対応についての研究は数少なく、養成段階においてもその力量形成も十分ではなく看過されている可能性がある。また、現職養護教諭の軽微な救急処置の実践においては、その養護教諭自身の力量に依拠しながら進められているのが現状である。養護教諭の特性を活かした比較的軽微な救急処置のあり方について、実践に即して明らかにした知見は少ない。

\*弘前大学教職大学院  
Graduate school of Education, Hirosaki University

本研究ではこのような現状を踏まえ、学校で行う養護教諭の特性を活かした比較的軽微な救急処置における③処置、④保健指導、⑤記録と評価の指導過程に着目した救急処置能力向上プログラムの開発を行うにあたっての示唆を得るため、現職養護教諭と養護教諭志望学生の共同学習による「軽微な救急処置を中心とした研修」の効果検証を行うこととした。

## 2 研究方法

### (1) 調査対象

A 県内の養護教諭 2 名（経験年数 6 年目と 21 年目）、教育学部における養護教諭養成課程に在籍する 3 年次学生 9 名であった。

### (2) 調査期間

令和 5 年 12 月 24 日～令和 6 年 1 月 8 日までであった。

### (3) 調査方法

#### 1) オンラインによる研修の実施

令和 5 年 12 月 24 日・令和 6 年 1 月 6 日・令和 6 年 1 月 7 日・令和 6 年 1 月 8 日の計 4 回、1 回あたり 90 分のオンライン研修を行い、研修後に自由記述で回答を求めた。研修の概要は、以下に示す。

#### 2) オンライン研修の概要

##### ①研修の流れ

養護教諭自身が日常行っている比較的軽微な救急処置についての一つの実践事例を軸に、簡単に養護教諭の語りを切り口として進めた。養護教諭と養護教諭志望学生の質疑応答や話し合いを中心とした討議により、保健室来室時点から事例を時系列に追いながら、養護教諭の対応とその意味や考え方について考察を深めていくような形式とした。

##### ②研修の進め方

養護教諭養成に関わっている筆者がファシリテーターを務めた。学生が考えた質問を躊躇することなく素直に問うことができるように、「どのような質問にも意味があるので、稚拙な質問ではないか」というように遠慮することはないこと・養護教諭自身が答えを持っているのではなく、共に考察しながら導き出すことに意味があること・質問内容については、ファシリ

テーターが解説を加えるなどして進行するので安心して発言すること」などを事前に伝えた。

養護教諭に対しては、「学生の質問に答えようとしなくてもよく、その時々、児童生徒をどのように捉えて、どのように意味づけをして対応したのか」を振り返りながら、話をしていただくようお願いした。暗黙知<sup>5)</sup>により行動していることも多々あるので、即答することを目的とするのではなく、ともに振り返りながら意味づけすることを主軸に進める」ことを確認した。

#### ③ファシリテーターの役割

救急処置についての学部学生の学びをある程度把握していることと、参加した養護教諭は学部生及び大学院生の時にゼミの学生、院生であったことから、養護教諭としての考えについてもある程度把握していた。そこで、双方の共同学習のつなぎ役として、学生の救急処置についての学習状況から推察される質問の解説を行うことや、養護教諭が質問への回答に苦慮している時には、言語化を支援することを心掛けた。ただし、ファシリテーターが先導することがないように、発言者の意図と気持ちに伴走することを心掛けた。

### (4) 調査内容

養護教諭、学生それぞれに、以下の質問に対して自由記述をもとめた。

#### 1) 養護教諭

学びがあったこと、救急処置を振り返る機会があったか、学生の質問で考えが深まることがあったか、養護教諭同士の発言で考えが深まることがあったか、軽微な救急処置の重要性や意味づけや意義に気づく場面があったか、養護教諭の役割の重要性を感じる場面があったか等

#### 2) 学生

学んだこと、考えたこと、感想、本研修の会のあり方や改善点等

### (5) 分析方法

自由記述の内容をデータとし、内容の同質性により整理した。

### (6) 研究に対する倫理的配慮

研究の実施にあたり、対象者には、研究への参加は

自由意志であること、参加しないことによる不利益は生じないこと、途中辞退も認めることを伝えたいうえで、研修への参加を促した。また、データ分析及び公表にあたり、個人が特定されないように配慮した。

### 3 結果と考察

取り上げた事例は、中学生であったことから、以下、救急処置の対象を「生徒」と表すこととした。また、記述内容を記載するところは、「 」とし、「 」内は一部要約している。

#### 【学生の学び】

##### (1) 軽微な救急処置の判断過程に対する学生の学び

###### ① 先行情報と観察への気づき

「来室する時間の意味について、前日の欠席という先行情報と入室時の声色や話し方などの観察に合わせ・・・」「・・・保健室に来室する前の廊下から聞こえてくる足音から情報を得たり、普段の生活の様子や変化を観察していたりと、とても細かい部分まで気を配っていることが分かった」「来室した瞬間に足音、表情、姿勢、声のトーンなどいつもと比較し、たくさんの情報を読み取っている・・・」というような記述があった。【初期対応への観察や先行情報の活用】について、【具体的に考察】する場面が見られた。初期対応の判断の過程が多岐にわたることを事例をもとに考える機会となっていた。

###### ② 来室した瞬間の見立てを仮説として進めていく対応への気づき

「保健室に来室した瞬間の様子である程度見立てるということは、生徒を普段から観察しているからできること・・・」「・・・目の前の子どもと対話しながら進めていく・・・マニュアルではない・・・」というような記述があった。【来室したところから仮説】を立て、対応しながら、仮説を確認したり、修正していくことの重要性への気づきが見られた。

###### ③ 頻回来室者への対応の視点への気づき

「・・・本座談会を通して、毎回同じ症状で来室しても、しっかり問診し感染症などの除外診断を行うこと、様々な視点から生徒を捉えることにもチームとして動くこと・・・」といった記述があった。学内での学びの【基本的

事項の重要性を再確認】する様子が見られた。

##### (2) 養護教諭の養護活動の全体構造から救急処置を捉えることへの気づき

「来室した子どもへの保健室対応という限られた空間・一時点でのかかわりにとどめるのではなく、毎朝の健康観察や担任・部活顧問、保護者、スクールカウンセラー等との日常的な連携が大切なのだと改めて感じることができた・・・」というような記述があった。【養護活動全体から救急処置を捉える】ことへの気づきと、救急処置以外の日々の活動の重要性や、養護の対象である【生徒理解】を中心として養護活動が展開されていることへの気づきが見られた。

##### (3) 初期対応での仮説を生徒との双方向での関りの中で確認したり修正していく過程への気づき

「・・・来室時の声の調子や顔色を見てその子の状態を把握したり、話を聴く中で身体的不調の背景に他の要因があることに気づいたり、これらを含めて子どもに関わっていく中で本人の特徴をつかみ対応の仕方を検討していったり、訴え以外の情報から様々な気づきを得て対応していることが分かった・・・」というように、マニュアルをこなすような対応ではなく、生徒との双方向での関りの中で救急処置をすすめていくことへの気づきが見られた。

##### (4) 学生なりの養護教諭観の問い直しと今後の課題への気づき

「・・・養護教諭は助けを求めていたり、弱っていたりする子どもに対して、受容的であることは大切だが、受容と頑張る体験をさせるための働きかけ、この両者のバランスをとることの重要性を、今回の座談会で新たに気づくことができた。・・・この時、養護教諭のニーズを押し付けたり提案するのではなく、子どもに問いかけながらいかにじぶんで考え決定する機会を与えられるか、そしてニーズの共有化を図ることができるかが大切であり、かつ難しい部分だと思った・・・」というような記述があった。学部の養護学に関する専門科目の中で学生討論の中心となる「子どもの主体性への働きかけやニーズの共有化」といった学びを問い直し、さらには、何を学ぶのかを具体的にえがくことへの気づきが見られた。またその気づきは、方法論を求める学生の思考を原理や哲学的事項を求めるといった高次へと変化をうながすことの端緒も



うかがえた。

#### （５） 大学教育での学びの意義と限界性への気づき

「・・・大学の授業で大学生が子どもを演じるような授業では、重篤な症状への対応はある程度決められたマニュアルがありそれを遂行することで養護教諭の役割を学ぶことができる。一方、軽微な救急処置への対応は、対象生徒の家庭の背景や性格を知り、これまでの来室の状況等を知ることで対応の判断をしていた。それは、現場で生徒を対応しているからできることで、学生によるロールプレイでは限界がある・・・。軽微な救急処置では、今学んでいる救急処置のマニュアルだけを求めるのではなく、目の前の子どもを知り、対話し、他教員とも密にコミュニケーションをとりながら様々な選択の分岐を吟味していけるようになりたいと感じた・・・」というような記述があった。【大学教育での限界性に対する納得】を得、【今後の学びへの視点】を見出していた。特に対象者は３年次学生であったことから、４年次の保健室での実習となる養護実習への重要な気づきとなっていた。

#### 【養護教諭の学び】

##### （１） 学生からの質問による省察への触発と深まり

「・・・学生さんからの基本に忠実な質問により、自分の事例を俯瞰してみる、詳細にみることの両方ができたことによって、自分の対応を振り返ることができました。詳細に見ることができて、自分の思考も確認できました。暗黙知も引き出していただきました。生徒が保健室の入り口に立った時に、思い浮かべたことを思い出しました・・・」というような記述があった。養護教諭同士などでの研修ではあまり注視されないような基本的な質問に触発され、詳細に救急処置過程を振り返る、言語化するプロセスが生じていた。このことにより、省察への深まりがあったと推察される。

また、「・・・事例紹介をしたのは、頻回来室なのでまたいつもの来室にすぎず、「欲張らないで現状維持」を目標にしている生徒であった。そんなに配慮もなく、ただ淡々と対応していたイメージであったが、意外と生徒を思っていたんだと共学の後、さらに、もっと大切に丁寧に対応しようという思いが湧いたのも不思議です・・・」というような記述があった。学生との共学により、スモールステップで丁寧に救急処置対応を振り返ることにより、養護教諭自身の養護教諭観が揺さぶられる様子がうかがえた。

##### （２） 学生の子ども目線での意見が有用

「・・・学生さんが子ども目線に立ったときの意見は参考になりました。自分が子どもだったらこうされたい、こう思ったと考えるという視点は、自分（養護教諭）にはなかなか立てない視点だったので、参考になりました・・・」というような記述があった。学生の立場ゆえの素朴な視点での意見により養護教諭の視野や視点が広がる様子が見られた。本会の開催にあたり、質問や意見については、内容をジャッチせず、全てが受け入れられる座談会である事を共通理解することで、素朴な意見が出しやすかったことも背景にあるのではないかと推察する。

##### （３） 根拠をもった暗黙知による対応を言語化し自覚化する過程の学び

「・・・来室時のルールを実施するかどうか・カードだけに依拠せず、来室を直接担任や教科担任に断らせるかどうか・来室時の問診カードを生徒に記入させるかどうかといった質問は、そうさせる・させない意味を問われることで、とてもじっくり考える機会となりました。状況により、行き当たりばったりだなと感じていたのですが、結構、自分自身に中に対応の理由があり、考えが深まったと思います・・・」との記述があった。根拠をもった対応を暗黙知で行っていたことを、再度、自分自身に問う場面が座談会の中で生じていたのだろうと考えられる。その場面で、養護教諭自身が、自己と向き合い、誠実に考えて、学生に対応していた。その思考する養護教諭の姿勢にも、学生には多くの学びがあったと考えられる。学士課程での学びで終わるのではなく、そのことを基本に、教育現場で実践知として深めていくことの重要性を教えられる場面でもあったと考える。

##### （４） 養護教諭同士の学び

「・・・初任の頃から直感が働くということについて、興味深かったです・・・日常を知ることの意味をあらためて感じました」「・・・保健室来室者の来室時のルールについて・・・将来の子どものことを考えてというような発言があったと思います。決まりや規律を守る事を伝えながら保健室経営することで、子どもの成長や保健室の円滑な運営につながるのだと感じました」というような記述があった。経験年数の異なる養護教諭同士がそれぞれに触発される場面があった。

#### (5) 頻回来室事例によるマナー化への自己への警鐘

「・・・頻回来室者の子どもにきちんと優しく受容していたのか、自身を問うことができた・・・」というような記述があった。事例提供者の養護教諭からも同様の意見があった。頻回来室という、日常の救急処置対応の中でマナー化に陥りそうな事例を取り上げるにより、あらためて、軽微な救急処置対応の意味を深める好例であったことが伺えた。

#### 4 まとめ

養護教諭と養護教諭志望学生による少人数での座談会形式のオンラインによる共同学習を行った結果、以下のような効果が見いだせた。

学生においては、生徒の先行情報と観察による初期対応、来室した瞬間からの仮説的アセスメントの後、生徒とのやり取りと多くの先行情報を活用して、身体症状を含めた生徒理解を深め、生徒と養護教諭のニーズの共通化を図ることや、学生なりの養護教諭観の問い直し、学部における学びの意味などに気づいていた。

養護教諭においては、学生の基本的で素朴な質問により、省察を触発され、根拠を持った暗黙知による対応について言語化し、自覚化する場面がみられた。

このように、現職の経験した救急処置事例を軸として、学生は学内における理論的な学びと実践を往還させて実践的思考力と実践力を、現職は自己の実践を根拠もって行っていることについて理論的に省察するこ

とを通して実践力と省察力を学ぶ様子がみられ、双方の学びの深化があった。

また、共同学習により、学生はロールモデルを得、現職は若手養護教諭に対するリーダー的役割としての力量形成を行うことにもつながったと推察する。

#### 謝辞

本研究にあたり、ご協力くださいました養護教諭の先生方、学生の皆さんに心より感謝申し上げます。

#### 引用文献

- 1) 唐牛藍, 佐藤綾子, 佐藤道子他: 小・中・高等学校における保健室利用状況の実態調査, 弘前学校保健科学, 27, 2008, 73-82
- 2) 河本妙子, 松枝睦美, 三村由香里他: 学校救急処置における養護教諭の役割～判例にみる職務の分析から～, 学校保健研究, 50, 2008, 221-233
- 3) 岡美穂子, 松枝睦美, 三村由香里他: 養護教諭の行う救急処置～実践における「判断」と「対応」の実際～, 学校保健研究, 2011, 399-410
- 4) 養護教諭ヒヤリ・ハット研究会: 事例から学ぶ養護教諭の「ヒヤリ・ハット」, ぎょうせい, 2012
- 5) 楠見孝: 実践知, 有斐閣, 2012, 4-31

#### 付記

本研究は、科学研究費助成事業 JSPS KAKENHI (基盤県有 (C) 課題番号18K02605) の助成を受けた研究成果の一部です。

(2024. 1. 12 受理)